

# ペルー世界遺産の旅



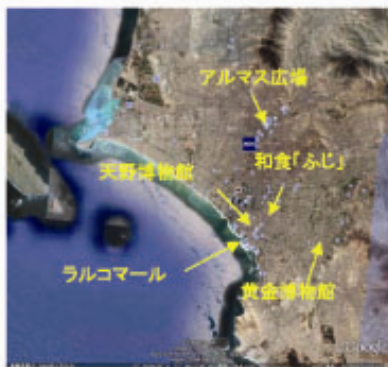
岡村冴子

2009年9月

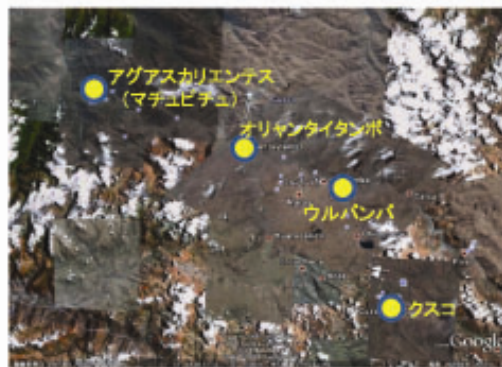
## 目次

旅のきっかけ .....	3
リマ到着 .....	3
インカの衝撃：黄金博物館 .....	3
いよいよナスカへ .....	5
アンデス越え .....	6
クスコからアグアスカリエンテス（マチュピチュ）へ .....	7
ついに来たマチュピチュ .....	8
驚きのファッションショー .....	9
インカの都クスコ .....	10
リマ最後の夕食 .....	12
最後の大トラブル .....	13

## Google Earthより



リマ市街



クスコーマチュピチュ地域



## 旅のきっかけ

今年の春先、8月にブラジルのリオデジャネイロで行われる国際学会出席の準備をしていた夫が珍しく、「学会のあと一週間の休暇を取ってマチュピチュに行こう」と言い出した。私もテレビで、度々見るマチュピチュは印象深く思っていた。せっかくブラジルまで行くのだし、この機を逃しては、体力的にも行くチャンスはないだろうと、マチュピチュにナスカも追加して、ペルー世界遺産巡りを計画した。

## リマ到着

リオデジャネイロでの全ての行事を終え、早朝5時40分発のリマ行き直行便に乗った。定時に take off した飛行機は、アンデス山脈を横断しています。睡眠不足でボーッとした頭にも、アンデスの山並みは鮮やかに飛び込んで来る。マチュピチュへの助走が始まった。ペルーの旅はいろんな意味で衝撃的な経験をする事になります。リマ空港にはガイドの Onojima さん（日系2世）が出迎えてくれ、ともかくガイドに会えたことに安堵しました。まずリマ旧市街の簡単な観光からペルーの旅の始まりです。リマは、征服者ピサロが1535年に建設を始めた街です。駆け足ながら、リマ旧市街（セントロ）の中心であるアルマス広場やピサロが基礎を築いたというカテドラルや当時から同じ家系が現在まで住み続けている最も古い家などを見物しました。



写真1 アルマス広場から見るカテドラル



写真2 スペイン上陸以来同じ家系が住む家

## インカの衝撃：黄金博物館

リマ旧市街の簡単な見物の後、黄金博物館へ行き、数々の貴重なコレクションを見て回った。私はペルーに関して、インカ帝国、マチュピチュ、ナスカ、そして「コンドルは飛んで行った」と、ミーハー的なことしか知りませんでした。ガイドの詳細な説明に、古代の人が驚くべき知識を持っていたことに感動しました。

ペルーの歴史をごく簡単にまとめると以下ようになります。1万年くらい前、モンゴロイドがユーラシア大陸から、当時は地続きであったベーリング海峡を越え、南米大陸に渡り、定住しながら南下して行った。そこで、約3000年前から、各地で小規模な文明が起こりまし

た。インカ以前のこれらの文明をひとくくりにしてプレインカ文明（アンデス文明）と言います。これらが時を経て統一され大きな国としての形をなしたのがインカ帝国で、今から5-600年くらい前のことで日本では、鎌倉、室町時代になります。ところが最近、ペルー北部海岸地帯でエジプトよりも古い（約5000年前）階段状のピラミッドが発見され、世界遺産として登録されました。ペルーの考古学は、この文明の解明に向けて活気を帯びています。いずれ解明が進めば、「四大文明」から「五大文明」に、教科書の記述が変わる可能性が高いと考えられます。

約2000年前の文明では（日本では弥生時代から飛鳥時代にかけて）、すでに金や銀の精錬、溶接、金メッキ技術、脳手術（注1）複雑な模様を作り出すはた織りと超微細なレース模様を編み出す技法（注2）さらに人、鳥、動物をかたどり鮮やかな着色をした陶器（注3）などなど、。これらが2000年前の人々が作り出したとはとても信じがたいものばかりでした。「どうして？なんで？」。こんな複雑なものが精密な機械のない時代にどうして作れたのか、私の頭はこんがらがったままでした。古代人へ「あなた達はえらい！すごい！」と、敬服の限りでした。

-----  
注1 頭部にダメージを受けた時、頭の中の悪い血を取り除く必要があると考えられた。頭蓋骨を、石で作ったナイフで切り開き、手術をした。縫合する際、切り口が合わなくなった部分には、金の薄い板をあてがって縫合した。それを示す人骨がいくつもある。

注2 織物の模様の種類の多さ、複雑さ、緻密さは仰天すべきものです。超極細の（世界最細といわる）糸を紡ぐ技術は、直径2mmのビーズに6本の糸を通すほどのものです。針は、サボテンのとげを使用しました。

注3 陶器は、時代や地方によって違いがあるが、それぞれ、誠にユニーク。いろいろなものをモチーフにして作ってある。独特の酒瓶があります。まず、日本の土瓶（蓋のない大きめの急須）をイメージしてください。それが鳥や人や動物の形をしています。蓋の部分もふさがれているのですが、急須の取っ手に相当する部分が半円形の細い管になっています。半円の頂には同じサイズの管でできた注口が3-4cm、半径方向外側に向けてまっすぐ付けてある。これは酒を注ぐ際に、空気が上手く抜けて、「ぼこぼこ」や「どくんどくん」という音がしないための仕掛けだそうです。さらに、取っ手と90度方向に倒しても空気が抜けないため酒がこぼれません。これもまたすごい発想です。一つおもしろいものを見ました。陶器の絵柄に日本と共通のものがありません。猿とカニがけんかしている「サルカニ合戦」、鳥を使って魚を捕っている「鵜飼い」、酒を「おちょこ」に注いで飲む宴会風景です。また、詳しくは述べられませんが、「18歳未満禁止」のものもたくさんあります。

-----  
昼食のためにガイドさんが用意してくれたのは、リマのミラフローレス地区の海辺沿いにあるモダンなショッピングセンター（ラルコマール）内にあるレストランでした。日本人の口に合うペルー料理を堪能した後、明日ナスカの地上絵を見に行くため、リマより約250km南下した町ピスコ近くのパラカスの宿へ出発しました。

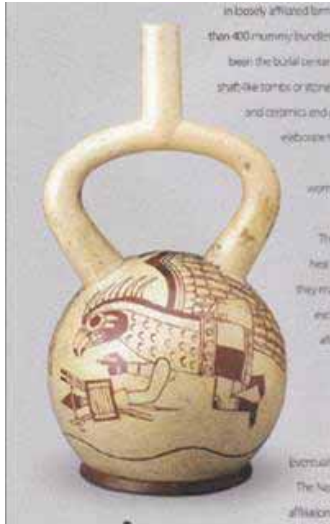


写真3 インカの酒瓶  
(F.G.Doig “Ancestors of the Incas” より)



写真4 パラカスのホテル

陽も傾きかけた荒涼とした風景の中のパンアメリカンハイウェイ（南米大陸の西の海岸線を縦断する7000km超のハイウェイ）をひたすら走った。私達は睡眠不足や疲労で、自然と寝入ってしまった。遅く着いたパラカスの宿は、2年前ピスコ周辺で起きた大地震の爪痕が残る所がありました。海辺に立つ新築の「ラ・ハシエンダ・バイア・パラカス」ホテルは中庭に大きなプールを配し、センスの良い洗練された広い部屋で、旅の華やかさを感じるすてきなホテルでした。

### いよいよナスカへ

翌朝近くのピスコ空港から12人乗りの小型飛行機で、ナスカの地上絵の見物です。目的地まで30分ほど飛んで、いよいよ絵が描かれている地点まで来たが、訳のわからぬ線が縦横に走り、地上絵の線との区別が難しい。パイロットは時折日本語を交え「あれあれ」、「これこれ」と指さして教えてくれ、「わかった?」と聞いてくれる。私は目を凝らして見ていると、「あれかー」と見えてくる。「はちどり」、「さる」、「コンドル」、次々と見つけられるようになったが、度重なる左右の急旋回に体がついて行けず、「気持ちわるーっ!」。半分ちょっと見た所で私はダウン。それでもほとんどの絵は横目で眺めながら見ました。なぜ、この絵が描かれたかは諸説あるようですが、想像の域を出ず、未だ謎のままということです。

機上から見下ろすナスカの地上絵は、スケールが今ひとつつかめず、私にはさほど強い印象は残りませんでした。途中から気分が悪くなった事や、昨晚、パンアメリカンハイウェイから見た悲惨な交通事故や人々の貧しい暮らしの光景が強烈すぎたせいかもしれません。

ナスカの地上絵の見学を終え、リマに戻る途中の有名なグルメレストラン「EL PILOTO」（ペルーのテレビにも数回登場とのこと）で遅い昼食（なんとインカ風焼きそば）をとり、リマのホテルに落ち着きました。明日からマチュピチュ行きなので、三泊四日の旅支度を整え、残りの荷物はまた、このホテル戻ってくるので預かってもらうことにした。



写真5 ナスカ地上絵を見るセスナ



写真6 くもの地上絵（右上：線だらけで見つけにくい）

## アンデス越え

リマ空港からアンデスを越えて標高 3400 m（富士山頂に近い）の高山都市で、かつてはインカ帝国の首都であったクスコに向かう。クスコは大昔は湖だった所が干上がって盆地になった場所にある。そのためか飛行機は、小高い山をいくつもかわし、大きく旋回して、手を伸ばせば山にさわれそうなほどの距離の所を下降して行く。めったにない風景です（ローマ法王がクスコを訪問された時イタリア空軍パイロットが着陸時にびびった？という話もある）。飛行機が無事着陸し、空港ビル近くの定位置で止まった。しかしドアが開かない。機内で待機していると、RESCUE と書かれた車がきて、飛行機に放水を始めた。「すわ、なにごとか！」、トラブっているのかと緊張していたら、スペイン語の機内アナウンスがあり、乗客から拍手があった。後の英語のアナウンスによると、かなり著名な機長の定年前のラストフライトであった。しゃれた演出だ。テレビの取材もあり、ちょっとしたハプニングに出くわしました。ミーハーの私は、機長の所に行って、握手をしてタラップを降りました。



写真7 アンデスの山々（窓ガラス傷だらけ）



写真8 ウルバンバのしゃれたレストラン

## クスコからアグアスカリエンテス（マチュピチュ）へ

クスコ空港には、現地のダンスに魅せられここに住み着いたという日本人女性ガイドが迎えてくれました。いよいよあこがれの地、マチュピチュへ向けての第一歩が始まった。空港からさらに高い山を越えて、「聖なる谷」ウルバンバ溪谷へ下った。溪谷の途中に、小さなインカの村ウルバンバがある。メインストリート(?)を折れると忽然と別世界が現れる。ピュッフェ式のこじゃれたレストランで、屋外に円形の(茅ふき)屋根だけが付いたオープンスペースの食堂が三つある。インカのfolkloreが流れ、広い庭にはアルパカもいる。「おおーっ。桃源郷みたい。」周りの貧しい風景との違和感が強烈に際だつ。私はここで、おいしい料理を食べてはしゃいでいたが、少し居心地の悪さも感じた。

昼食後また車に乗り、聖なる谷のほぼ中心にあるオリヤンタイタンボに向かう。「タンボ」とは現地のケチュア語で旅籠の意味、「オリヤンタイ」はインカの将軍の名前だそう。街の中心は土産物屋が所狭しと並んでいた。村の背後にある遺跡を見るため、狭い道を少しばかり行くと、斜度45度もありそうな斜面にだんだん畑が作られていた。ガイドさんの説明によると、上からの眺めが素晴らしいということで、私は、そこらの階段を上するような気分で、畑の脇の石段を一段二段と登り始めた。ところがとんでもない!。石段を20段も上らないうちから息が上がり、胸が苦しくなってくる。急勾配の階段を休み休み300段ほど上ってやっと頂上に着くと、もうへとへと。さらに、振り返ってみると急勾配の景色が広がり、足がすくむ。頂上広場には、巨大な石(高さ4m、幅10m、奥行き1m)が6個並んで立っていた。何かを作った跡らしい。この石は、このあたりで採れる石ではないので、山を越え、川を越えて運んできたとのこと。この時代にどんな方法でここまで運び、この斜面を持ち上げたのか不思議に思った。初めて見る巨石の文化に圧倒された。

オリヤンタイタンボの町に戻り、駅からマチュピチュの麓の村アグアスカリエンテス行きの列車に乗った。オリエント急行が経営に参加しているということで、列車の色や車体は、オリエントエクスプレスを模している。その列車が、ウルバンバ川に沿ってくねくねと谷間を下り、約2時間ほどかけて今夜の宿に向かった。



写真9 オリヤンタイタンボの遺跡



写真10 ウルバンバ川に沿ってマチュピチュへ

## ついに来たマチュピチュ

アグアスカリエンテスの宿の朝は夜明け前から騒々しかった。多くの泊まり客が朝一番の5時発のバスを目指して出発して行った。私達は8時に宿を出た。「マチュピチュ遺跡入り口」まで行くバス停は、雑多な人々でごった返して、満員の客を乗せたバスが次々に発車して行く。バスはウルバンバ川沿いを少し走ってから「エッ！」と思うような切り立った山肌を登り始めた。つづら織り状に造られたガードレールもない道をバスは対向車を見事に交わしながら登っていった。窓側に座った私は道路の端が見えないので、スリリングなドライブをすることになった。30分程で遺跡入り口に到着。これから3時間の行程で遺跡を見て回るの、トイレに行き（遺跡内にトイレはない）準備万端整えて（帽子、日焼け止め、サングラス、傘、蚊が多いので虫除けを塗る等）ゲートをくぐった。

ほんの20mも行かないうちから私はテレビで見ていただけの方が良かったかもしれないと思い始めた。私は高所恐怖症なのです。一歩踏み間違えば、切り立った崖を真っ逆さまに落ちるような狭い道を歩いて行かねばならない。私は忍者のように壁にぴったりくっついて、下が見えないようにしてガイドさんについて行った。途中からは山の中に入るの、安心して珍しい植物を見ながら歩き、くねくねした山道を登りつめると、ジャジャジャジャーン！！バックグランドミュージックが聞こえるかのように眼前にあのテレビでお馴染みの風景が現れる。生のマチュピチュを私は見てる！世界中の人々がマチュピチュを目指し、長い時間かけてたどり着くこの風景は決し期待を裏切らない。整然とその美しい姿を空中に見せてくれる。



写真 11 まるでスイッチバックのバス道路



写真 12 ついに来たマチュピチュ

この遺跡は標高2940mのマチュピチュ（老いた山）と2690mのワイナピチュ（若い山）を結ぶ尾根にまたがる標高2400m付近に造られている。ちなみにピチュは山という意味だそうです。インカの人々は太陽と月を信仰の対象としていたので、神に近づけるような高い場所に村を造ったのでしょう。この遺跡は皇帝の離宮とも言われている。この村に入るインカ古道は8本あり、インカ帝国の首都クスコにも通じる道があった。当時の皇帝は輿に乗り、アップダウン激しい山道を何日もかけてクスコからやって来た。当時の人々の苦勞が（ちょっとだけ？）感じられるインカ古道3泊4日のトレッキングツアーもあります。テント、食料を背負いオリャンタイタンボからマチュピチュに入るツアーです（私達はその行程を列車



とバスで来た )

私達がよく目にする空中都市といわれる部分には、色々な建造物が建てられた跡があり、インカの人々の生活が推し量れます。目も眩む断崖絶壁に造られた見渡すばかりの段々畑、石積みで見事な曲線を描く太陽の神殿、大きな石を削って造られた日時計、生活を支える水汲み場、皇族の住まいなど。これらすべて「カミソリの刃一枚も通らない」と言われるほどの精緻な石組みで造られています。石に直角の切り込みを作って、もう一つの石を直角に削って両者を寸分違わず接合させるという驚異的な技術の高さを示している。身分の高い人の部屋は石壁がツルツルに磨かれ他と区別されている。鉄を持たなかったインカの人々は根気よく長い時間をかけ、石で石を研磨して造りあげていったそうです。もう一つ驚いたことは生活の基盤となる灌漑設備です。こんな高地にどうやって暮らしていたのか。これだけの段々畑にどうやって水を引いたのか。最初の疑問は水です。

プレインカの時代から水路は存在し、インカ帝国の時代になると国家規模で灌漑用水路の整備拡大をし、各地に水の役人を配置して水の管理をしていたといわれています。マチュピチュも水は山から引かれ斜面を利用して造られた水路に水は流された。水路は村全体に行き渡り、所々に水汲み場も置かれ人々の生活を支えた。段々畑の脇にも水路が造られ豊かな実りをもたらした。段々畑には高さをもたらす温度差を利用して作物を作っていた。上段の温度の低いところではジャガイモ、下段ではとうもろこしなど、土地を上手く利用して 200 種に及ぶ作物が作られていたそうです。

マチュピチュ遺跡の背後にそびえ立つワイナピチュにも登山道があり、ここを登る人は一日 400 人と制限されているので朝早くに出発しなければならない。断崖絶壁の山に造られたつづらおりの道を登ると、また違った空中都市が見られ絶景だそうです。あまりの急勾配に落下事故もあるようで私達は「パス」しました。往復だけで約 2 時間は必要ですので高い所が好きで体力のある人はトライして下さい。



写真 13 よく見ると断崖絶壁



写真 14 インカの踊り手とにわかモデル

### 驚きのファッションショー

昨日の直火焼きのような日差しに夫は、こんがり焼け健康そうだが、私はこの陽射しとハードなウォーキングで少々ダウン。クスコに帰る列車まで時間があるので午前中は休養することにした。午後パッキングを済ませチェックアウトする時、一悶着ありました。ツアー

会社のバウチャーでは夕飯はすでに払ってある事になっているのに、夕飯代が請求された。夫は詳しく説明するが複雑な事になると英語が全く通じない。ホテル側の責任者らしい人は、ペルー側のツアー会社に自分で問い合わせても釈然としない様子だったが、何とか決着がついた。今まで泊まったホテルの食堂を思い浮かべると、泊まり客はほとんど食堂を利用していない。数人以上の団体なら別かもしれないが、私達のように二人で行くと、レストランで実際にサービスに当たるスタッフは、夕食付きの客とは思わないようだ。まずバウチャーのシステムの説明が必要。さらに、標準メニュー以外にワインの一杯も飲みたいと思って注文する。この時、ワインは自前で払うが料理はバウチャーに「込み」だといちいち説明し、出発時はワインだけ請求書が別になっているかの確認が必要だ。夕食付きの宿泊は、いろいろとトラブルの種が多い。ホテル夕食付きの計画はしないで、現地に到着してから夕食を取る場所を決める方が選択肢が広がって良いと思った。実際、ホテルレストランより魅力的なレストランがいっぱいあった。このアグアスカリエンテスのホテルは特に苦労した。すったもんだしたホテルを出て駅に向かう。

帰りの列車はビスタドームといって少しグレードアップした客車だった。乗務員は狭い通路を手慣れた動作でテーブルクロスを敷きお茶の用意をしていく。軽食とドリンクが出たかと思うと賑やかな音楽と共にインカのお祭りに登場する踊りが客車内で披露される。白い「目出し帽」まがいをつけ、頭にはにぎやかな飾りをつけ、一見「なまはげ」のような仕草です。いっとき乗客たちを喜ばせたかと思うと軽快な音楽に変わり、乗務員の男女がモデルに早変わり。ペルー特産のアルパカ製品を次々に着て、ファッションショーが始まった。乗り降りまくった後、また乗務員に戻り、製品の販売が始まった。

この列車は上部がガラス張りになっていて風景が、パノラマで見られるのは良いが、陽ざしが強いのですごく暑い。しかし陽が傾きだすと、列車内の温度が急激に下がってくる。陽も暮れると乗客はセーターを取り出して着込み始めた。月と星だけの夜を列車は緩やかな速度で走り、一時間半遅れでクスコ郊外のポロイの駅に着いた。出迎えてくれたガイドさんの車でクスコのホテルに向かった。

## インカの都クスコ



写真 15 クスコのアルマス広場



写真 16 インカの人々とアルパカ

強行軍の旅も終盤でいささか疲れ気味。午前中の遺跡見学を少しカットしてもらって、クスコ郊外の最も近いサクサイワマン遺跡だけ行った。この堅固な要塞遺跡からクスコの街が一望できる。遺跡は巨石を3層に積み上げ、ジグザグな城壁が360 mにも渡る巨大な要塞です。征服者スペイン人から政権を取り戻すため立ち上がった皇帝マンコ・インカが2万の兵士と共に陣取り戦ったが、石の武器しか持たないインカ軍はあえなく負けてしまった。

毎年この広場では「太陽の祭り」が盛大に催され、インカの儀式がそのまま復活し、この日一日、クスコはインカ帝国となり人々は帝国の民となる。古代インカの儀式には生け贄の習慣があり、14-15歳の美しい傷一つない男の子が全国から捜し出されていた。選ばれる事は名誉な事ではあったが、我が子を守りたい親は、我が子に傷を付け、生け贄にされるのを免れたそうです。遺跡は全て石。土器と違い変化のない石は、正直のところ食傷気味。う～ん、石はもういいかな！

午後は市内の由緒ある建造物を見学。クスコは大インカ帝国の首都として栄えたが、16世紀スペイン人により征服された。征服者達はインカの建造物をことごとく破壊した。インカの神殿跡にはキリスト教の大聖堂、皇帝の宮殿があった場所には教会を、そして皇帝の宮殿の土台を利用して邸宅を建てた。皮肉にもその邸宅は1590年に起きた地震で土台だけ残して崩れたそうです。今は博物館になっている。これらの建造物は庶民の憩いの場のようなアルマス広場を囲むように建っています。この広場を歩いているとインカの民族衣装を着たおじさんが寄ってきて一言、「インカのかみなりおこし」と日本語で言った。私達は始め「ハァー？」と思ったが、思い当たるペルーのお菓子をリマ空港で見つけて買っていたのだ。「う～ん、なるほど、あれだわ」。日本人観光客が教えたのであろうが上手いネーミングだと思った。

広場の周りにある土産物屋をのぞいたりして楽しんだ後、クスコからリマへ戻るため空港に行き、ここでお世話になったガイドの坂口さんと別れました。クスコ空港で飛行機待ちしている間、ココ茶を見つけ買った。実は買った後で、ちょっと気になり念のためにホテルへ戻ってからインターネットで調べると、コカインに関する物はすべて日本に持ち込む事は禁止されていた。残念だがリマのガイドさん達にあげることにしました。夫はリマに向かう機内でガイドブックを頼りにレストランを捜していた。私が体調を崩して、ほとんどこちらの食べ物を受け付けなくなっていたので、リマにある日本料理店に行く算段をしていた。リマ空港で再びガイドのOnojimaさんに会い、荷物を預けてあるホテルに向かう。ホテルでタクシーを呼んでもらいその日本料理店に行った。



写真 17 リマの日本料理店「ふじ」



写真 18 インカ巻

引き戸を開け一歩店に入ると、そこはまさしく日本でした。馴染みの日本人客がカウンターで鮪をつまみながら弾んだ会話をしている。付き出しにひじきの煮物が出てほっとする。3週間ぶりの醤油味は心に沁みる。カリフォルニア巻に対抗してインカ巻があり注文する。う～んイマイチ。鮪とアボガドを具にして巻いたもので両方ともぐちゃという食感だから、きゅうの千切りぐらい入れたらどうかと思った。私はガス欠が一気に満タンになったように体力も出てきた。久しぶりに食事らしい食事をした。さあ明日でペルーにいるのも終わりだ。最後まで楽しもう。

## リマ最後の夕食

リマ滞在最終日もフリーにしていたのでゆっくりしていた。朝遅い朝食兼昼食をペルー第一日目の昼食を食べた海辺のレストランで撮った。ここはホテルから近く、歩いて10分ぐらいの所にあります。日本でいう小規模なショッピングモールみたいな所で、高級品を売る店や土産物店、高級なレストラン等があり、映画館もあって人々の憩いの場でもあるようです。ここに集う人々もほとんど白人系でペルー社会の二重構造を感じます。

午後は知人から推薦された天野美術館に行きました。南米で手広く商売をしていた天野芳太郎氏がプレインカ後半のチャンカイ文明に興味を持ち研究を始めた。その時発掘して収集した土器、織物をリマに博物館を造り公開している。ゆっくり見て欲しいとの博物館の意向で予約制になっています。日本人のスタッフが丁寧に説明してくれるので理解が深まり面白かった。この博物館には膨大な数の織物、レース編みなどが収集され見応えのある作品が数限りない。古代人の技術の確かさ、デザイン性の豊かさに圧倒させられる。

博物館から帰り、最後の晚餐を又、あの海辺のレストランで撮ることにした。食事のオーダーのやり方は充分学習したので一人前を取り、熱々のペルー風パエリアを二人で食べた。ホテルに戻り、忘れ物のないよう最後のパッキングをしてチェックアウトも済ませ、Onojimaさんを待った。出発は深夜の0時20分発のデルタ航空便である。余裕をみて8時30分にOnojimaさんがホテルに迎えに来る。リマ空港ではOnojimaさんの配慮もありスムーズに航空会社の搭乗手続きも済み、色々とお心遣いして下さったOnojimaさんに感謝し、お別れしました。



写真 19 インカの「伝統工芸師」



写真 20 ラルコマールにて

## 最後の大トラブル

出国手続きも済ませ、ゆっくり duty free の店を見て回り、夫はリカーショップでブラジルの酒ピスコをカードで買った。出発ゲートで飛行機の搭乗を待っていると、duty free のレジ係の人がカートに品物を載せてやって来た。当然その品物は私達に渡されると思っていたら、どういう訳か店の方に戻りはじめ、品物を買った人はレジの所に来るよう指示された。レジの所に行っても何の説明もなく、スペイン語の喋れる人だけがレジ係にまくし立てていた。係の人達は右往左往するだけで一向に解決する様子もない。そうこうするうち、現金で品物を買った人だけにお金が戻されている。私達はカードで買ったので別のレジで精算するというのでカードを持って行かれる。飛行機の搭乗はすでに始まっているのにその人はなかなか戻ってこない。時間はどんどん過ぎていく。係の人に催促するも英語が通じない。英語の分かる人に来てもらい精算処理をしているレジの所に行く。カードを持っていった人は何回も器械に入れて処理しているが、どうしてもうまくいかない。何度も同じ事を繰り返す。カードで処理出来ないなら現金をくれればいいのと思うが彼らは受け付けない。夫は強い口調で彼らに抗議したが飛行機の出発時刻まで 10 分を切った。もうダメだ、カードだけ取り返し飛行機に乗った。私達が乗り込むとドアは閉められた！  
結局何が起こったのか不明のままに終わりました。